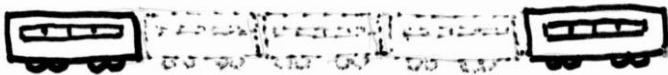


藤田浩子の 少し昔のこと 〈66〉

切符

何時の頃までだったか、忘れてしまいましたが、昔電車に乗るときは、学生や勤め人が使う定期券以外は切符でした。改札で駅員さんがその切符にハサミを入れてくれました。駅員さんによっては、カチカチカチカチとリズムカルにハサミを鳴らし、次々と切符にハサミを入れていく、まさに職人技でした。しかも切符にハサミを入れながら「おはようございます」なんて挨拶してくれる駅員さんもいました。改札に「人」がいたころの話です。

それがイオカードという、改札のこっちからいれると、素早くあっちから出てくるというカードになりました。それからスイカになりタッチするだけで、通れるようになりました。効率化からいえば、素晴らしい進歩です。不正もできなくなりまし



た。白状しますと、私も若いころは何度か「薩摩の守」をやりました。乗る駅の切符と降りる駅の切符を持っていれば、途中はタダで乗れるというあの手です。キセルとも言いました。ご存知とは思いますが、薩摩の守平忠度（たいらのただのり・タダ乗り）にかけたしゃれです。キセルは吸い口とたばこを詰める先の部分だけが金属で途中は竹でできていたので、途中をごまかすという意味です。改札に駅員さんがいたころの話ですから、改札を通るときあのドキドキ感は、スリル満点でした。

あ、論旨がずれました。切符売り場からも「人」が消え、改札からも「人」が消え、スーパーのレジからも「人」が消えつつあります。大きな会社では、受付嬢がいなくなりインターホンがあるだけです。世の中のあちこちから「人」が消え、コロナ禍でまた「人」離れが進みそうで、寂しく思っています。

リレー連載 <199>

わたしの大好きな絵本

さんちゃん（おはなしおはなしグーチョキパー）

『うどんのうーやん』

作：岡田 よしたか
ブロンズ新社

うどん屋さんが人手不足のため、うどんのうーやんは自ら丼ごと走って出前に行きます。途中、空腹の野良猫に「ちょっと食べ」。中身が半分になってしまい「何とかせな」と、干してあった素麺に「ちょっと中、入ってくれへん？」「けど僕ら細いでえ」「まげてしもたらわからへん」。万事この調子で、困っている煮干し、梅干し、木綿豆腐にいじめられた絹ごし豆腐、果てはタコ焼に海老フライやコロケ、ミニトマトまで丼に入れて、川を渡り山を越え、とんびに襲われるという危機も脱して着いた出前先は…？

何が来ても「かまへん、かまへん」「まあ、ええか」と受け入れて「よっしゃ、みんな頼むでえ」河内音頭の掛け声と共に突き進むうーやんに、生まれも育ちも大阪の私は心から共感し励まされるのであります。

自粛で出前が増えている昨今、うちにもうーやんの新商品「にぎやかうどん 500円」来てくれへんかなあ～

